

おとな・り(re)スタッフの 喜怒哀“愛”楽

“世田谷を愛する”おとな・り(re)スタッフの日々のできごと・ひとりごと

世田谷坂道事情
上る、下る、
時々絶景



砧地域、玉川地域南部を通る国分寺崖線は約8km続き、緑豊かな坂の街を形作っている。ここに住む私にとって上り下りは日常である。相棒の電動自転車を励ましながらペダルを踏み、下りのスリルには年甲斐もなく高揚。成城と喜多見をつなぐ不動坂は好きな坂のひとつだ。山道のようなカーブをく

るぐる回りながらの急勾配は上りも下りもドラマティック。頂上から眺める夕焼けは住宅地の絶景である。区内で最も急勾配の車道は岡本3丁目の坂(富士見坂/写真)。ここは上るといより登る道。かつて馬が登れなかったという22度の傾斜に電動自転車で挑んでみると、8合目ぐらいから壁のように道が迫ってくる。バッテリー容量がぐんと減り、自転車の限界を知る。この坂は歩行者用の階段を景色を楽しみながら上る方がよい。運が良ければ富士山を拝める。

くるといより登る道。かつて馬が登れなかったという22度の傾斜に電動自転車で挑んでみると、8合目ぐらいから壁のように道が迫ってくる。バッテリー容量がぐんと減り、自転車の限界を知る。この坂は歩行者用の階段を景色を楽しみながら上る方がよい。運が良ければ富士山を拝める。

<写真・文/麦島まゆみ>

開発工事が進行中の下北沢。私がこの街を初めて訪れたのは1970年代後半、まだ小学生の頃で、初めて友達とハンバーガー店に入ったり、中古レコードやジーンズを探したりと、少し背伸びする街だった。当時はライブハウスや音楽バー、小劇場などが次々オープンし、音楽や演劇文化がこの頃に出来ていた。狭い道、狭い店。昔の旧道にいくつもの商店街が交差し、住宅街の路地まで店が入り込んで宝探しする楽しさ。人の多さと狭さが車の侵入を拒み、年中歩行者天国的な独特の賑やかさがある。特に古着や雑

貨、家具など「中古モノ」を扱う店が多い。この街は昔からなぜか最新製品よりアナログ的なモノの価値が通用する街なのだ。世田谷の自然もよいが、たまにはシモキタ散歩で脳を刺激しよう。魅力的な安い飲食店や看板に目を奪われているうちにすぐ1万歩は超えているはずだ。



下北沢の
賑わい

<写真・文/宮腰昌男>

中学校開放プールを
利用してココロも
カラダもリラックス



クリニックでよく会う年齢(よわい)90近いご婦人に「見事な太鼓腹だね～」とマジマジと言われた。世間の目があるように恥づかしくなかった。昨夏、近くの中学校が温水プールを開放しているのを知った。初めて行ったのは夜6時過ぎだった。明るく清潔感があり、天井も高く開放感がある。ウォーキングコースを利用した。"コレがなかなか良い

んです"。胸の高さまで水があるから独特な浮遊感、脚腰に負担がかからないのでリラックスできる。初めは水中で歩くのに苦労したが、力を抜いて水に身を任せるとスイスイ歩ける。慣れた方は、手を上下したり、後ろ向きで歩いたり、体の不自由な方は手を引いてもらいながら楽しんでいる。隣の完泳コースでは自由形やバタフライでガンガン泳いでいる。"いつか行きたいですね"。小さな目標。そういえば、完泳コースに私のみたいな太鼓腹の方は、たぶんおられませんね(笑)。

<文/藤岡隆司>